惜身命

しゃくしんみょう

上田三四二

借身命

上田三四二

文藝春秋

惜身命（しやくしんみよう）

昭和五十九年十月十五日　第一刷
昭和五十九年十二月二十日　第二刷

定価　一五〇〇円

著者　上田三四二
発行者　西永達夫
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表（〇三）二六五―一二一一
印刷所　精興社
製本所　中島製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

©Miyoji Ueda 1984

Printed in Japan

目次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

惜身命(しゃくしんみょう) 7
木草の宿 37
冬日 59
稲妻 87
天眼 113
著莪(しゃが)のひと 133
遁れぬ客 157
天の梯(はし) 197

装幀　川島羊三

惜身命（しゃくしんみょう）

惜身命（しゃくしんみょう）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

京都に着くと雪になった。

改札を出た関屋は、タクシー乗場に行こうとして駅前の広場に賑わしく降る雪を見ているうち、建仁寺にまわってみようという気になった。

傘の用意がない。そのまま会場になっている東山七条のホテルに行けば傘はいらないが、寺のなかを歩くとなるとそうはいかない。

躊いはなかった。早めに東京を発ったので、会のはじまる四時までに一時間あまり余裕があった。雪はその何するともない時間の谷間をうずめるように降っていた。

彼は一緒に来た二人を顧みた。Kの着物が気になったが、KもSも、随いてくるという。

階上の観光デパートで傘を買った。

「軽いのを。」

「はい。」

若い売子が選んでくれた折畳みはおどろくほど軽く、春の雪を載せて歩くたのしさも思われた。

Sも中年向きの婦人用を買った。Kは持ってきていて、もう鞄から取出している。

タクシー乗場には列ができていた。雪は鋪装を濡らして降り、駅前の広場を、前方の展望塔のあるビルディングも見えないまでに白い華やぎで満していた。傘のない人の流れが急ぐ。雪は順番を待つ彼らの足許にも舞い、地につくあとから消えていった。

烏丸通を五条まで上り、五条大橋を渡って東山通に出る手前で大和大路に折れる。祇園はもうそこで、禅寺にはおよそ似つかわしくないそういうなまめいた場所に建仁寺の黒い山門が開いていた。山門の前で三人は車を降りた。

久昌院への道は関屋の記憶のなかで怪しくなっていた。彼は山門を入ったところに八手の葉が雪を載せているのを右に見ながら、淡雪の流れるように降る広い山内の道を見当で歩いていった。あたりに人影を見ない。法堂の屋根は白くなっていた。

建仁寺の塔頭の一つ、久昌院の庭に、関屋がかつてそこに所属していた歌誌「春暁」の主宰者、矢島宗規の歌碑がある。宗規の傘寿を祝って門弟たちの建てたもので、八年前、関屋もその除幕式に参列して祝いの言葉を述べたのであった。

関屋はそのときの言葉を憶えていた。彼はこんなことを言った。——これまで私はこの由緒あるお寺をかくべつ意識することはなかったが、今日からはこの歌碑によって、ここが自分にとって京都の要ともいうべき場所になった。それが嬉しい。私は京都に来るたびにこの寺をおもい出すだろう。そして時間のゆるすかぎり歌碑を訪ねたい。そう彼は言ったのであったが、さてとなると旅はいつもあわただしく、その後彼はいちども久昌院の庭の土を踏んでいなかった。

春の雪に見舞われたこんどの京都行は、その矢島宗規の米寿を祝うためのものであった。

山内の砂地の道を行くと、見当をつけたあたりに、見覚えのある塔頭が見えてきた。表札が出ていた。

「ほら、ぼくの記憶に間違いはないだろう。」

関屋は頼りなげな彼の様子を可笑しがりながら随いて来ていた二人を顧みた。明るい傘の色が、二つ並んだ顔をうつくしくしていた。彼は門を入り、石畳を踏んで庫裡にまわった。案内を乞い、また引返して、門の横手にある竹の柵を外して庭の方へ歩いていった。

関屋は学生時代を京都ですごした。卒業後も、そのまま大学病院にのこって、内科を専攻した。彼はインターンを終るのと同時に「春暁」に加わって短歌をはじめたが、そのころは創刊者の泉谷古堂がまだ健在で、矢島宗規は創刊当初からの古堂の協力者として同人の筆頭にいた。古堂なきあと、宗規が継いで、それから数えてもはや三十年にちかい歳月が経っていた。

短歌をはじめたばかりのころ、関屋は雑誌の締切が近づくと、京都駅のちかく、七条東洞院上ルに歯科医院を開いている矢島宗規を訪ねて歌を見てもらった。診療室は二階にあった。古い仕舞屋を改造した診療室で、彼はそのうす暗い階段をのぼって行くとき或る安らぎを覚えた。宗規は彼を認めると診療中でもかまわず招じ入れ、カルテをひろげた小さなテーブルのそばに坐らせた。患者のいないときは白衣を着た宗規の小柄な体はいつでもそのテーブルの向う側にあって、

「やあ、来たね」というように微笑した。彼はその月の短歌を書き写した原稿用紙を差し出した。

「なるほど。」

それが口ぐせの矢島宗規は、頷きながら丁寧に原稿に目を通したが、関屋にむかってあまり批評らしい言葉を口にしなかった。まだ駈け出しの関屋を一人前にあつかって、彼の好きなようにいろいろな試みをさせ、可能性を引出そうとしているふしがあった。

「この『うづたかく積まれゐて』というのは、単に『たかく積まれてゐて』とするのと、どっちでしょう？」

関屋が訊くと、宗規は二、三度その個所を声に出して読んで、

「『うづたかく』のままでいいんじゃないかな。」

そんなふうに決着をつけたが、押しつけることはなかった。そして清書を関屋が自分の考えで「たかく積まれゐて」と書いて出しても、不愉快を見せることはなかった。

患者があると宗規は彼をそのままにして立ち、送り出してまた彼の前に坐った。

関屋は小柄で柔和な矢島宗規とそのようにして小一時をすごし、自分の歌を見てもらうほかに、「春暁」の最近号の感想などを話し合って診療所を後にした。これといって内容の濃いわけでもないその訪問が、彼には楽しみだった。慰めとも、憩いとも思われた。彼は「春暁」の筆頭同人で副主宰者格の矢島宗規の下でのびのびと作歌にはげむことのできるのを仕合せに感じ、師弟といっても、ずいぶんと歳がちがうゆえにかえって気心の通じ合う兄弟子と弟弟子のようなその関係を大切に思ってきたのであった。

医師になったばかりの二十代の関屋の眼に、矢島宗規はかなりの老人に見えた。髪はうすく灰色で、鼻の下に蓄えた髭も褐色がかり、すこし背を丸くしたその人に、彼は老人として親しみを

寄せたのであったが、そのときの宗規はいまの関屋とほぼ同じ年齢だったのだ。信じられない気がした。その後の宗規が一向にそれ以上歳をとるふうには見えず、はじめに出会ったときのままであるようなのも、不思議でならなかった。もちろんそれは錯覚で、錯覚のもとはといえば、初めて出会った宗規が歳以上に老けて見えたからであった。年寄りくさく、弱そうに見えた矢島宗規は、しかし本当の老齢に入ってからは老いることを忘れたように元気に、故障なく生きて、傘寿をむかえ、米寿に達し、引続き「春暁」を主宰して歌にも文章にも衰えをみせなかった。

「春暁」で短歌の勉強をはじめた関屋は、その後評論の方で認められるようになったのを機に、東京に移った。療養所に勤めるかたわら、文筆の仕事に力を注いで、東京に移ってからもその仕事は少しずつ実って、一つならず、二つまで賞を与えられる幸運にも恵まれていた。

彼は評論に力を入れたが、短歌も止めたのではなかった。東京には泉谷古堂の播いた種が生えて、「春暁」は地方誌にはめずらしく東京支部をもっていた。関屋はその支部に関係したが、勉強が進むにつれて、もっと自由な立場で歌に向いたい気持が押え切れなくなって、矢島宗規に願い出て会を退いた。弟子を束縛しない宗規の温情主義はこのときも関屋の上に充分に注がれたので、関屋は退いてからも何のこだわりもなく宗規と「春暁」に親しみを持ちつづけることが出来た。彼が「春暁」の同人ではなく支持者の位置に自分を置いてから、七年が経っていた。

このたびの矢島宗規の米寿祝賀会に、関屋と同行したKとSは東京支部の同人で、関屋との付合いも長かった。個人の資格で来ていたが、主催者が「春暁短歌会」になっているために、支部の代表という意味をも兼ねていた。

会場になっている東山七条のホテルに着いたとき、雪はまだ止んでいなかった。入口に置かれた傘台に濡れた傘を吊した関屋は、靴の汚れを気にしながら回転ドアを押してロビーの絨毯を踏んだ。会場はロビーのつづきの一階にあった。彼はたちまち、旧知の誰彼にかこまれた。京都は何といっても関屋の古巣だった。彼は連れてきた支部の二人を顧みるいとまもなく、次々に懐しい顔の前に立たされた。「春暁」以外の京都歌壇の先輩や友人の顔もあった。大阪や奈良から来た、関屋の旧い歌の友達もいた。

矢島宗規は歯科医師会の長老である上に、長男の宗雄が父の跡を継いで盛業していたから、その方面の関屋の知らない人たちも多かった。「春暁」の新しい会員についても彼はほとんど知識を持っていなかった。月々送ってもらっている雑誌は手にとったが、宗規をはじめ主要な同人の作に目を通すのが精一杯で、目礼をされたり名告って挨拶をされたりしても、それがどの欄でどういう作品をつくっている人であるかがわからず、そうでなくても名前や顔を覚えることの不得手な彼は、いつものようにばつの悪い思いをしなければならなかった。

受付で署名を終り、リボンをつけて貰い、奥の方に談笑している矢島宗規を認めて近づこうとしたとき、松岡孝行が前に立った。

「歌会始の歌はどうしてあんなにつまらないんだい？」

関屋は歌の方でも順調に仕事を重ねて、前の年から歌会始の選者になっていた。

「選者のがかい？」

「いや、選歌もね。」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.